

委員会だより

＜4月2日(日) 12名出席＞

【1】財務報告：00年4月度決算報告()内:00年度年間予算

	00°収入累計	00°支出累計	収支差額
一般会計	2,800,246 (6,257,868)	1,982,074 (6,157,868)	818,172 (100,000)
建設会計	2,929,150 (3,356,956)	209,365 (2,795,000)	2,719,785 (561,956)
愛の献金	481,377 (780,065)	86,111 (320,000)	395,266 (460,065)
信徒預金	119,375 (619,375)	0 (440,000)	119,375 (179,375)

- ▶特記事項：◆一般会計：山崎神父様¥114,000、受賢者¥27,000、他¥2,304の特別献金を頂く。
◆祭儀費：保久神父様 ¥70,000をさし上げた(堅信や他のミサのお礼)。
◆行事費：梅村司教様 ¥50,000をさし上げた。
◆堅信¥95,362、復活¥17,347、堅信祝品¥17,535それぞれ支出。
◆建設会計：司教館新築祝として¥100,000を拠出。

【2】議題：

- ◆4月9日堅信式、4月23日後復活、聖週間：
◆関係者のご協力で、山崎神父様ご入院中にも関わらず、無事に終えることが出来た。
◆山崎神父様入院中、並びに退院後の運営について：
◆委員会の総意として、位田さんを中心として信徒一人一人に入院中の神父様のご援助をお願いする。
◆5月20日過ぎに検査の結果が判明する。予定はまだはっきりしないが、その後の容態で司教館を通して聖テレジア病院に転院されては、との提案あり。(林神父様を通して、保久神父様に話をする)
◆泣き部屋の神父様の居室に改装する見積り、またエレベータ設置の見積りの2通りの見積りをする。
◆ミサの運営(予定)：
◆5月7,14,21日(日曜日) 午前9時のみ上原神父様
◆5月13,20日(土曜日) なし
◆5月28日(日曜日) 以降鶴飼神父様の予定
◆インターネット・ホームページの内容：
◆担当委員(小野)が戻ってから、改めて審議。
◆青少年問題関連：6月24日頃メドに、二俣川教会を誘って合宿の計画(?)がある由(予定)
◆大聖年のポスターが中和田教会には貼ってない：教会にあるはずなので探してみる。
◆亡くなられたパウロ山中健三さんの50日祭 納骨ミサ：5月9日に石川神父様の司式で挙行の予定。

壮年会だより

＜5月21日(日) 10名出席＞

- ◆5月7日(日)に開催された教会委員会の報告は、議事進行を早めるため内容について(山崎神父様の病状と、今後の対策)は、次号の広報「なかわだ」に掲載されますので本日は報告書をお読み頂くと致します。
◆山崎神父様に、壮年会よりお見舞いをお届け致しました。
◆6月の聖書朗読者が決まりました。
6/4(福島さん) 6/25(下村さん)
◆教会の庭にある、植木の手入れの時期を迎えまし

た。神父様からの依頼で剪定をすることに決まりました。5/27(土)の10:00からです。ご協力お願い致します。

- ◆入院中の山崎神父様に代わって、何回か御ミサをして下さった上原神父様が、5/21の定例会の前に、カトリック教会が全世界的に取り組んでいる、「最貧国債務帳消し」運動について、日本のカトリック教会の活動の一端をお話になり、債務国の悲惨な現状を撮影したビデオを見せて下さいました。大変感銘を受けた次第です。
◆壮年会、婦人会、それぞれ活動資金の一助にと資金カンパ致しました。
◆壮年会員の小谷さんが、アマチュア音楽コンクール(ハロークラシック)において、ハーモニカ演奏・日本一に輝かれた快挙を、皆さんでお祝いするパーティーを会議室で行ないました。パーティーには婦人会有志の方々にも出席していただき、たまたまいらした上原神父様もおいでになって、益々賑やかになりました。
◆そのコンクールの本選会の演奏と、表彰式の模様を撮影したビデオや、音楽テープも流されて、臨場感溢れる祝賀会と成りました。
◆本年度の壮年会会費未納の方がいらっしゃる様です。納入下さいますようお願い致します。

婦人会だより

＜5月21日(日) 30名出席＞

- ◆マリア・アンナ吉田ちかゑさん 皆様に
お見舞いお礼ご挨拶
◆委員会報告
◆遠足24名参加 ご協力していただいた方へ御礼
◆教会の戸締りの都合により、奉仕日に限り台所を使用しない
◆上原神父様から
◆開発途上国債務帳消援助について説明
◆朝日新聞に問題点を意見広告掲載の資金カンパ協力
◆特別会計より3万円歳出決定
◆山崎神父様の現状(5月26日お見舞者より)
日ましに御回復され、手があがるようになった様子。手すりをつたってゆっくり歩くりハビリに頑張っているらしいです。何よりも明るい笑顔でお顔色もいいようです。

次回例会は6月25日(日)、次回当番はA地区です。

ミサ 当番表 (2000年6, 7月)

月/日	主 日	朗読、奉納	オルガン
6/4	主の昇天	壮 年 会	美 底
6/11	聖霊降臨の主日	青 年 会	岩 淵
6/18	三位一体の主日	婦人会A地区	森 田
6/25	キリストの聖体	壮 年 会	保 科
7/2	年間第十三主日	壮 年 会	美 底
7/9	年間第十四主日	青 年 会	岩 淵
7/16	年間第十五主日	婦人会B地区	森 田
7/23	年間第十六主日	壮 年 会	保 科
7/30	年間第十七主日	婦人会B地区	美 底

当番の方は10分前には集合して下さい。ご都合の悪い方は典礼委員(萩原氏: Tel. 802-6258)迄お申し出下さい。

広報 なかわだ 第259号

今月の予定

聖霊降臨の主日 6月 26日
三位一体の主日 6月 26日
山崎神父霊名祝日 6月 29日
サロン 6月 11, 25日
レジオ 6月 9, 16, 23日



2000年 6月号

中和田カトリック教会
広報委員会発行
泉区中田北 1丁目 9-1
Tel. (045) 803-6141
平成12年 6月 4日



いろいろなこと ④

山崎 正 俊



神奈川の鶴見にある禅宗の本山・総持寺の末寺である若松の禅覚寺にいる妹の喜んでる姿を見ると、弟のいまの「墓」についての悩みは、どうしたことであろう。両親は仏教徒でありながら、父は禅宗、母は浄土真宗のままでこの世を去っているのに、母も父も同じ禅覚寺の方丈さんの意向を聞いて、なんのためらいもなく、その宗義によって葬られる。同じ墓石の下に、似た骨壺に入れられることで、何の問題もない。このあとで、弟の悩みがはじまり、この頃、こまった。

教会では、近く、今年も「灰の水曜日」になる。昨年、枝を焼いて、灰を準備して、ほっとしたところに、弟が突然顔を出す。姉の一周忌の式をするための打ち合わせに来た。昨年は「友引」だったのだが、火葬場は当番制になっていて、すこし手間どりはしても、順調に終わったと憶えている。こんどの一周忌は、霊園墓地でしてほしいというのであった。これはなんでもない。ところが、いろんな形でそこに眠っている仏たちと、これからそこに来るはずの私の遺体までもとなった時、あとを見るはずの者には、荷が重過ぎないか。宗旨の異なった者が、あの世で仲良くやってゆけるのか。これまではなんとかしてこれたが、よく考えなくてもすぐにわかりそうなもの。いろんな処に在る墓を毎年訪うことなど、簡単にできた話ではない。宗派は別でも、墓の管理者は、すべて気にしないことにきめてくれたから、それでよいのだが、ちがった信仰を一緒にくたにしてもよいものか。誰も気にならないのか。私は、兄貴とのことだから嫌ではない。でも、墓を1カ所に集めてみても、それに文句をつけてりして、元の場所に自分のための墓石を30万も掛けて作ったらしい姉のはどうしたらよいのか。後の迷惑を考えずに、墓のことまで、おまえたちのお世話にならぬを実行できたつもりでも、事故死したこの姉は、そこが祖先の墓所ではあっても、そこが住職さんと私がケンカ分かれのようにして墓を移しておるからには、後に生き残った私等はどうするか。持ち帰った遺骨を、友人のお寺さんは、その死に様に恐れをなしたのでもあるまいのに、何もしてくれぬ。だから間に合わせで、兄ちゃんに頼んで鎌倉霊園まではすませた。二人目の姉の病死には、これは、カトリックで立派にすませた。でも、私もお兄ちゃんも死んだら、どうなるのか。「相続」ということは、墓のことも受け継ぐことだから、カトリックのこともわからん息子の手にはあわぬだろう。後のことの世話のできる人がいないなら、規定ですから他処へお移りねがいますと云われて、お手上げですでは、すまないことすな。・・・これは我慢のならぬこと。

「先祖をだいにじにすると、なにか」「どこまでが、祖先か」。わからぬ。

一編さんの遺言にも、「野に捨てよ」という意志表示はあった。お釈迦様の教えのなかにも、捨身飼虎という言葉があった。

・・・ここで、(多くの弟たちの気掛かりの消滅のために)、いまから、これからのすべてを含めて、その救いの祈りを続ければよいことです。これこそが、神様や仏様の思いやり深さのキワミではありませんか。御心配のこと御無用に。

(2000. 3. 7)



大聖年にローマの四大聖堂と アシジ巡礼の旅 (その1)

花坂 昌子

免償のお恵みが受けられるとのことで、この3月聖地への巡礼の旅に出かけました。バチカンへ行けるなんて考えられないことでした。母の白内障と眼底出血の手術のあとに引いた風邪が一月以来長引き、やっと起きて家の中を歩ける状態になった頃で、私自身も体調をくずして咳がひどく、出発の前日に休日診療の病院で診てもらった程でした。しかし、主人の許可を得、留守を頼んで、3月21日ローマへと出発しました。

一行は、イタリア人神父様と私たち三人(姉とWさんと私)を含む40名のツアーです。ローマのホテルに着くとすぐ、私たちはミネラル水を求めてパブレストランまで40分も歩きました。最初の夜は、暖房もなく毛布も一枚きりで、寒さのため両足にこむら返りをおこし、持参のホカロンが大いに役に立ちました。翌朝は天気も良く、心浮き立つ思いで9時にバスに乗りバチカンへと向かいました。教皇様はイスラエルへ巡礼にお出かけで謁見はできないと前もって聞かされてはいましたが、残念でした。ローマは交通規制で大型バスは現地まで行けず途中下車、以後連日徒歩の巡礼でした。バチカン市国へはカードを渡され入国。博物館内はカメラは禁止。タペストリーの廊下は16世紀の刺繍の壁掛けが並び、色褪せ防止のため薄暗くされていました。



ミケランジェロ 「アダム」の創造

天井にはイタリア全土の地図が描かれ、奥へ進むと暗い部屋々々の壁や天井にはラファエルの名画「アテネの学童」「ペテロの解放」「聖体の論議」などが続き、感動する暇もなく人の波に押されて「システリーナ礼拝堂」へと進みました。修復されみごとに生きかえったルネッサンス美術の結晶！

ミケランジェロの人物の細かい描写と色彩にしばし戸惑い、感動しました。正面には「最後の審判」、両側の長い壁面にはモーセとキリストの生涯が描かれ、天井には①闇と光の分離、②太陽と月の創造、③大地と水の分離、④アダムとエヴァの創造、⑤エヴァの創造、⑥原罪と楽園追放、⑦ノアの大洪水、等々部屋いっぱいの絵画に包まれていました。「最後の審判」には人生と世界の儚さの戒めとして、400人近い人間がうごめき、

審判者キリストとマリア様を中心に、左には天に昇る人々、右には地獄に落ちる人々、そして中央にはラッパを吹く天使たち。

午後サン・ピエトロ大聖堂を訪れ、「聖なる扉」のところで跪いて祈りを捧げました。薄暗い聖堂の中を進んで丸屋根(クーポラ)の下にきました。見上げる頂上には父なる神が座し、天国を表す胴輪のところはミケランジェロの作品とのこと。下の内環部分には「あなたはペトロ。この岩の上に教会を建てなさい」とラテン語で刻まれ、「栄えの司教座」はクーポラの下に燦然と輝いています。ペトロのブロンズ像の足元を私たちも触れました。巨大な聖人たちの像が立ち並ぶなか、大理石の「ピエタ」が目にとまりました。聖母の悲しみと忍従の御姿が、古典的な静けさをもって美しく見えました。

サン・ピエトロ大聖堂を出て歩いてサンタナ教会に行き、そこでミサに与りました。その後免税店で買い物をし、はぐれたり心細い思いなどもしてホテルに戻りました。近くのスーパーやデパートでも手振りや下手な英語でなんとか買い物の体験もしました。夕食の頃ともなると、同行の方たちとも徐々にうちとけて、神父様を中心にワインやイタリア料理を楽しみました。

ローマ滞在3日目、オプションでアシジ巡礼に向かいました。バスは高速道路を80キロのゆっくりした速度で走りますが、料金所はテレパスのシステムで60キロで通過します。ここでは渋滞はありません。バスの中では神父様による大聖年の免償の説明が続きました。アシジは緑豊かなイタリア中部ウンブリア州の中央にあるアペニン山脈の高台にある街で、眼下に平原や丘陵を見晴らす景勝の地です。しかも魂の憩いの場、精神の安らぎの場でもあると言われます。



ミケランジェロ 「ピエタ」

(つづく)



幼児室に思う

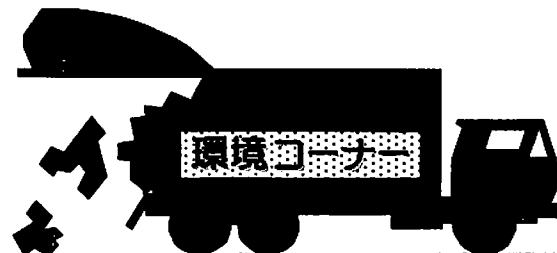
F. S.

17～18年前に引っ越して来て、教会の玄関に入り、目の前に「幼児室」という札、「えっ何これ……！」子供連れは聖堂に入れないの……？と思い聖堂に入る勇気がなく、渋々幼児室に入り、ミサに参加しました。しかし、この日は一日、晴れ晴れとした気持ちになれなかったのです。幼児室では子供達は、おもちゃを出して遊んでいて騒がしく、とてもミサに参加しているといえる状況ではなかったからです。しかし、子供達が遊んでしまうのも当然かも知れません。幼児室から見えるのは、大人の後ろ姿だけで祭壇は見えず、声はマイクを通して聞こえるものの、難しく理解できない……。何をしに来たのか分らないのですから。子供達も、祭壇が見えれば神父様が何をなさっているかを見る様になり、静かにミサに参加できるのではないのでしょうか。

この日以来、自分が子供をどのようにミサに参加させたかよく覚えていません。中和田教会に来た時は、幼児室に入っていたように思いますが、他の教会に行っていたように思います。

「幼児室」の札がなくなったのにも気が付きませんでした、この時の印象が未だに心に残っています。

本来の教会の為に、子供達は、祭壇の近くで、ミサに参加して欲しいと思います。



ポイ捨ての戒め

石井 三雄

人がリサイクルを行なったのは、物を廃棄する時それが何かに再利用出来ないかと考えたときに始まった。それは、人類がこの地球上で営みを始めた時期にさかのぼる。そしてそれが営々と今日に受け継がれている。

リサイクルされるその種類と規模は比較にならないが、近年あまりにも簡単に物が入手できるために再利用しようとする行為が薄れ、大量消費、大量廃棄のサイクルが20世紀後半に定着した。そしてその結果、資源の消費と廃棄物による環境破壊の返礼を受けるに至り、ようやく人々は事の重大さに気づいた。その中に化石燃料と呼ばれる原油(石油)はおよそ60年後には枯渇することが試算で判明している。私どもは昨年9月孫を授かったが、齢(よわい)で彼等が62歳になったときに、化石燃料はこの地上から消滅している計算である。

いずれにしても、他の天然資源も全て有限であることをはっきりと認識すべきである。そして資源を大切にすることと、再利用の重要性を子孫に伝承していく責任と義務を強く自覚すべきである。

日本とドイツの人々は、その勤勉さと几帳面さでよく似た民族といわれているが、リサイクルに取り組む姿勢はまるで違う。その几帳面さはなぜこれほどまでに隔たりがあるのだろうか。官民が一体となり、物を廃棄するときのシステムとその分別の徹底さはどうだろう。また、ゴミを捨てる意識も大変気になる。日本では観光地や幹線道路沿いに捨てられたゴミをよく見かける。人が見ていなければ「お構いなし」。まさに良心と道徳の欠如に他ならない。

こうして比較するとき、この二国の違いは自己愛対隣人愛というそれぞれの歴史的な宗教に起因しているように思えてくる。つまり、「家内安全、商売繁盛」に対し、片や「ゴールデンルール:自分にイヤなことは他人にしない、自分にして欲しいことを他人に行なう」の違いではないだろうか。

物を大切に、ポイ捨てを戒めることから「環境を考える」がスタートする。

万物の創造主は見ておられる。今からでも遅くはない。